

京都で、会いましょう。

I

International

C

Conference

C

Center

Kyoto

2019
Winter

国立京都国際会館



巻頭インタビュー

環境省地球環境局総務課研究調査室長 大井 通博氏

「京都議定書」誕生の地で
5月に IPCC 開幕

特集 彩催 Recommended Conference by ICCK

第34回 京都賞 記念講演会

「京都議定書」誕生の地で5月に IPCC 開幕 温室効果ガス排出量の算定方法などを協議

気候変動に関する政府間パネル(IPCC Intergovernmental Panel on Climate Change)第49回総会とその関連会合が、2019年5月6日から13日にかけて京都市で開催されます。国立京都国際会館で開かれる総会では、「パリ協定」の実施に不可欠な各国の温室効果ガス排出量の算定方法の改良に関する報告書などの重要案件が協議される予定です。地球温暖化防止に関する初めての国際的枠組みである「京都議定書」から「パリ協定」まで一貫してこの取り組みを推進してきた環境省地球環境局の大井通博研究調査室長に、総会への期待や今後の見通しなどについてお話を伺いました。



環境省地球環境局総務課研究調査室長

大井 通博
Michihiro Oi

Profile

京都府生まれ。平成7年3月京都大学大学院理学研究科修了。同年4月環境庁入庁、同20年から3年間フランス・パリにある経済開発協力機構(OECD)に派遣、同23年8月環境省地球環境局国際地球温暖化対策室室長補佐、同26年7月同室長などを経て同30年7月から現職。現在気候変動適応室長を兼務。

世界が目指す 今世紀後半の実質排出ゼロ

——地球温暖化が原因とみられる世界的な異常気象が続いています。また、米トランプ政権のパリ協定離脱表明など国際社会の動きも目が離せません。気候変動をめぐる世界と日本の現状、課題をどのようにみえていますか。

昨年の夏、日本だけでなくアメリカ、ヨーロッパ、アジアなど世界各地で異常

気象が続きました。これは地球温暖化の影響であるという見解を世界気象機関(WMO)も発表しています。非常に残念なことです。このままでは地球温暖化が今後ますます進むということもかなりの確率でいえると思います。そういう中で世界はパリ協定に合意して、今世紀後半の温室効果ガス実質排出ゼロを目指す取り組みに歩み出しました。離脱を表明したアメリカも現在はまだパリ協定のメンバーです。正式に離脱できるのは早くも2020年の次のアメリカ大統領選と同じ時期になります。実際にトランプ大統領の意向がアメリカ全体の声を反映しているかというところではありません。「我々はパリ協定に残る」というグルー



IPCC第48回総会(2018年10月、韓国)
Photo by IISD/
Sean Wu (enb.iisd.org/climate/ipcc48/6oct.html)

プがいくつかの州や主要企業の中から出てきています。また、アメリカの動きに同調する国も今のところありません。アメリカとともに世界の2大排出国である中国は、パリ協定に基づいて排出量の少ない世界を目指すと言っています。米トランプ政権の動きは世界の中で孤立しているということは強調しておきたいですし、パリ協定の大きな流れは止められないと考えています。

地球規模の科学、 政策的な温暖化対策

——そうした中で、国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の第49回総会が今年5月に京都市で開かれます。どのような規模や内容になるとみられているのでしょうか。

IPCCは30年前の1988年に195か国が参加して発足した政府間機関で、地球温暖化に関するありとあらゆる知見を集め、それを評価して、レポートにまとめる作業を行っています。科学的知見が充実してくる中で人間が出している温室効果ガスが地球温暖化に影響しているということが徐々に明らかになり、まさに地球規模で科学と政策的対応が一緒になって進んできていますが、その先駆けとなっているのがIPCCの活動です。今年の5月に京都で開催される総会には各国から約700人が出席して、温室効果ガスの排出インベントリー(日本語でいうと目録)のガイドラインを改定します。このインベントリーは、ある国からどれくらいの量の温室効果ガスが出ているかを示すものです。IPCCは従来からこのガイドラインを作っていますが、定期的に見直しが行われていて、今年の5月にその改良のための報告書をまとめようとしています。各国は温室効果ガスの種類別やエネルギーや農業などセクターごとに排出量を報告しているのですが、その計算をする際の算定方法

を統一するための新たなルールづくりの場がIPCCなのです。



「京都議定書」が採択された気候変動枠組条約第3回締約国会議(COP3)(1997年、国立京都国際会館)

京都から世界へ、 進化した「パリ協定」

——京都は地球温暖化防止に関する初めての国際的枠組み「京都議定書」が誕生した地です。そこで今回、IPCCが開催される意義、期待される成果はどんなものがあるのでしょうか。

ここで決まる排出インベントリーのガイドラインは各国の取り組みを測る物差しであり、パリ協定を支えるたいへん重要なものだと考えています。京都議定書で人類が初めて温室効果ガスを減らすという数量的な目標に合意しました。残念ながらそれはアメリカ以外の先進国だけによる取り組みでしたが、その間に中国やインドの排出量が増えてきて、新しく世界各国が入る取り決めが必要だということで、京都からパリへと進化してきたのがパリ協定です。京都とパリは歴史的、文化的にもつながりの深い歴史都市です。私自身両方の街に住んだことがありますし、京都議定書のできたCOP3の際は入庁3年目で右も左も分からず、京都国際会館の中を走り回りながら裏方の仕事をやっていました。パリ協定では5年間、担当者として交渉に携わりました。個人的にも大変思い入れのある会合ですし、ぜひ成功させたいと考えています。

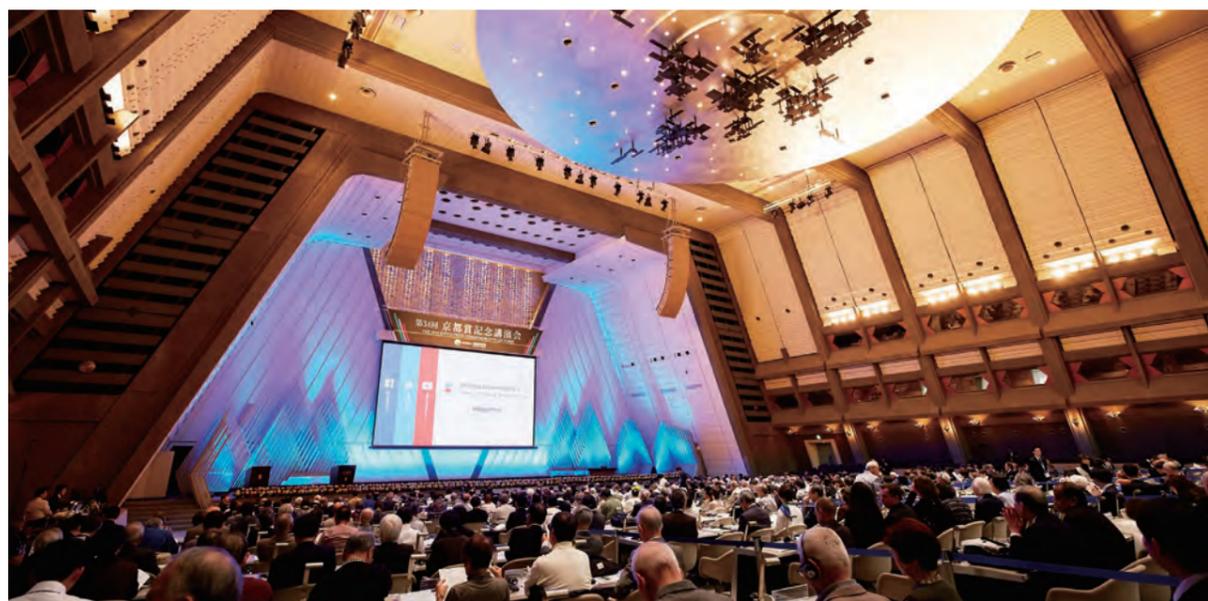
日本は環境技術と 開発途上国支援で貢献

——日本政府は、先進的な環境技術でパリ協定における2050年の目標実現に向けた気候変動対策に取り組むとしています。今後、日本が国際社会に果たすべき役割には、どのようなものがあるのでしょうか。

パリ協定は、世界各国に画期的な長期目標を作ることを求めています。日本は2050年に80%削減という目標を掲げていますが、それをどう達成するかという戦略を今まとめています。温室効果ガスを大幅に排出削減するという大きな方向性ははっきりしており、あらゆる分野での変革、イノベーションが必要です。日本はLED照明などエネルギー効率の高いさまざまな製品、エネルギー消費の少ない半導体、素材など先進的な環境技術をたくさん持っています。これは日本だけでなく、世界全体の排出量を減らすことに貢献できる技術です。これまで環境対策は経済の足かせになるという考え方が支配的でしたが、これからは脱炭素で経済を回していくという考え方が主流になるでしょう。ピンチをチャンスに変える発想の逆転が必要になります。そういう観点からの戦略を作る議論を今進めています。もう一つ大事なのが、開発途上国に対する支援です。開発途上国は自国の排出量は多くありませんが、すでに温暖化による被害が出てきています。日本でも気候変動適応法が整備されましたが、開発途上国がこうした状況に適応するために、日本をはじめとする先進各国はインフラ整備や防災、農業などに対する支援もしっかり進めていかなければならないと思っています。



第34回 京都賞 記念講演会



第34回京都賞の受賞者3人による記念講演会が11月11日、国立京都国際会館メインホールで開催されました。先端技術部門の神経科学者、カール・ダイセロス氏、基礎科学部門の数学者、柏原正樹氏、思想・芸術部門の美術家、ジョン・ジョナス氏がそれぞれの生い立ち、研究や活動の歩み、その成果などについて語り、800人の聴衆が熱心に耳を傾けました。



先端技術部門

脳の秘密を照らす光遺伝学 —単細胞藻類のタンパク質の研究から—

カール・ダイセロス 氏

神経科学者
スタンフォード大学 教授 / ハワード・ヒューズ医学研究所 研究員

私の研究は、脳を解明するという非常にシンプルですが、やり甲斐と魅力のあるものです。きっかけはロシアの植物学者が150年前に発見した光を当てると反応する植物プランクトンの存在です。DNAの二重らせん構造を解明したクリックは、脳の神経細胞を識別する理想的なシグナルは光だと予見していました。

2004年7月1日、私たちは光に反応する藻類の遺伝子を組み込み、光を当てることで神経細胞を刺激することに成功しました。藻類には、光を電気に変えるチャンネルロドプシンタンパク質が発現していて、光によって細胞が活性化します。ここから数年かけて研究を重ね、藻類のチャンネルロドプシン遺伝子を組み込んだマウスの右の脳に光を当てることによってマウスを左に回転させる実験に成功しました。

私たちはこのタンパク質の構造を解析し、イオンの選択性、動態、スペクトル特性を変化させることによってこのタンパク質が働く原理を解明しました。これによって、動物の行動を解明するための新たなタンパク質の創出も可能になりました。その結果、現在ではレーザーライトを細い光ファイバーを通して脳の深部まで届けることで、神経細胞のオン、オフを切り替え、行動への影響を観察できるまでになっています。

我々自身の複雑な脳の機能が解明できるようになったこの研究成果は、最初は本当に基本的なリサーチから始まったことなのです。150年前の植物学での発見から始まった光遺伝学は基礎研究がどれほど大切か、また小さな発見がいかによい研究につながるかということを示すとてもいい例だといえると思います。



基礎科学部門

代数解析と50年

柏原 正樹 氏

数学者
京都大学 数理解析研究所 特任教授

私は1965年に東京大学に入学し、2年後に数学科に進みました。1968年に佐藤幹夫先生と出会ったのが、数学への方向を決める決定的な要因となりました。そのころ、佐藤先生による代数解析セミナーが毎週開かれるようになりました。私は1年先輩の河合隆裕さんに強く勧められてこのセミナーに参加し、そこで佐藤先生に出会いました。それが代数解析の研究を始めるきっかけとなったのです。

佐藤先生は、代数解析の創始者です。数学では変化する量を関数と呼び、それを研究するのが解析学です。数とその演算(和・積)を通常の数以外のものにまで拡張して研究するのが代数学です。代数解析は、代数学を使って解析学の奥に潜む本質を解明します。

佐藤先生は1969年、変化が滑らかでない関数を代数的に扱うこと

を可能にする超局所解析というアイデアを提出されました。この考え方はその後、解析学だけでなく数学の他の分野にもいろいろな形で波及していきました。その中で幾何学と代数学を解析学を用いて結びつけるD加群の理論を確立したのが、私の中心的な仕事です。私は1971年に修士課程を修了し、佐藤先生と河合さんがおられた京都大学数理解析研究所の助手になりました。この時期、京都大学が超局所解析における世界の中心でした。

私は40人ほどの研究者と共同研究をしていますが、その中で他の分野について教えてもらったのも大きな収穫でした。表現論を教えてくださいたい岡本清郷先生もその一人です。研究しながら学ぶのは効率のいい方法ですし、共同研究者に恵まれたのは私の幸運でした。



思想・芸術部門

イン・ザ・シャドウ・ア・シャドウ

ジョン・ジョナス 氏

美術家
マサチューセッツ工科大学 名誉教授

子どもの頃、母は私をニューヨークのメトロポリタン美術館、MoMAやオペラに連れて行ってくれました。父は現代詩、現代文学を私に教え、アーティストになるようにと教えてくださいました。大学では美術史、文学、彫刻などを学びました。絵も好きでした。それらの芸術は、私の中で全く垣根を感じさせないものでした。

私は、パフォーマンスやインスタレーションなどを媒体として、対象のイメージを変容させるという表現形式を始めました。私の芸術は過去と未来のダイアログです。詩や映画で用いられる表現言語への関心が、作品の構造・内容の着想に不可欠なものになっています。ドローイングも私の作品と切り離せない要素の

一つです。どのプロジェクトでも、作品を展開する空間、技術、主題、素材やテクニックとの相関から、複数のドローイング方法を試してきました。また、身体動作へのアプローチと展開のほか、音楽との共演や鏡、円錐などの小道具を使ってきました。

1970年に日本に来て、初めてビデオを買いました。これは革新的な瞬間でした。自分を見ながら録画できるこのツールで、私のパフォーマンスは大きく変わりました。ライブビデオパフォーマンスを行ったり、ビデオ作品の自主制作を行ったりするようになりましたが、どちらも互いに影響を及ぼしました。映像と映像を併置することで語りや視覚効果を階層化・複雑化させるパフォーマンス、インスタレーションも手掛けてきました。

第15回 地球観測に関する政府間会合本会合 及び関連会議等 (GEO Week 2018)

2018年10月29日 — 11月2日



提供:文部科学省

第15回地球観測に関する政府間会合 (GEO) 本会合及び関連会議等 (GEO Week 2018) が10月29日から11月2日にかけて開催されました。GEOは、衛星、海洋及び地上観測等の複数の観測システムからなる全球地球観測システム (GEOSS) を推進するために設立された国際的な枠組であり、日本で本会合が開催されたのは今回が初めての事です。

本会合のほかにサイドイベントや展示会も実施され、5日間で、各国政府、学術界、産業界等から延べ約500名が参加しました。第15回本会合には、約30カ国の政府代表団及び約50機関の代表団が出席し、地域ごとの活動やGEOが優先連携3分野として掲げる持続可能な開発目標 (SDGs)、パリ協定、仙台防災枠組に焦点を当て、GEOSSと地球観測データの更なる活用に向けた活発な議論が行われました。

第34回 京都賞授賞式・記念講演会

2018年11月10日 — 11日



提供:稲盛財団

第34回京都賞 (稲盛財団主催) の授賞式が11月10日に行われ、京都大学数理解析研究所特任教授の柏原正樹氏 (基礎科学部門)、米スタンフォード大学教授のカール・ダイセロス氏 (先端技術部門)、米マサチューセッツ工科大学名誉教授のジョン・ジョナス氏 (思想・芸術部門) の3人に京都賞メダル、ディプロマおよび賞金1億円が贈られました。

柏原氏は代数解析学の要となる「D加群」の理論を確立・発展、ダイセロス氏は脳神経の働きを解明するための光遺伝学という新たな方法論を構築、ジョナス氏は身体表現とビデオアートを融合した現代芸術の手法を創始したことがそれぞれ評価されました。

また、翌11日には記念講演会が行われ、受賞者3人がそれぞれの研究や活動の歩み、その成果などについて語りました。

記念講演会の特集は P.3

TOPICS

ICCK自主企画 第66回 秋の宝松庵茶会 2018年12月2日



当館主催の第66回秋の宝松庵茶会が12月2日 (日) に開催され、約550名が参加し庭園にある茶室でのお点前や抽選会、伝統工芸品の実演などを楽しみました。

宝松庵茶会は宝ヶ池の「宝」、そして茶室の寄贈者である国際会館初代理事長松下幸之助氏の「松」の字を取って名付けられた茶室・宝松庵を使って昭和59 (1984) 年に始まり、毎年春秋2回開催されています。

また、京都の名産品の販売コーナーも賑わいをみせ、京の実演シリーズでは「京都 おはりばこ」によるつまみ細工体験が行われました。参加者らが梅の花びらのつまみ細工に挑戦し、一本の梅の木を完成させました。抽選会では京都名産のお菓子やお茶、お茶会イベントらしく古帛紗や扇子などの茶道具が当たり、当選者が出るたびに歓声が沸いていました。

自衛消防訓練大会 優秀賞受賞

9月12日、毎年各事業所の自衛消防隊の日ごろの訓練成果を披露し競い合う、左京自衛消防訓練大会 (第46回) が宝が池公園にて開催され、屋内消火栓操作部門で国際会館Aチーム、Bチームが共に優秀賞を頂きました。京都国際会館は、皆様が安心してご利用いただけるよう、今後も日々防火防災訓練に努めていきます。



57th ICCA (International Congress & Convention Association) Congressにて 当館が加盟40周年を記念して表彰されました。

ICCA (国際会議協会) は、1963年に設立され、オランダのアムステルダムに本部があります。

会員は約100カ国、1100人を超え、MICE業界の国際的な交流や国際会議等の促進を目的とし、世界で開催されている国際会議の統計やデータベースを収集、発表している国際団体です。

当館は、1978年以来ICCA会員として活動しています。2018年はアラブ首長国連邦のドバイで年一度のコンGRESSが11月に開催され、当館が加盟40周年を記念して表彰されました。今後もICCAを通じて、国内だけでなく海外での日本・京都のプレゼンス向上のために寄与して参ります。



NEW HALL INFORMATION vol.10

京都らしい設え

特別室



京都国際会館では昨年10月にオープンしたニューホールに、地元自治体の京都市と連携し、京都の伝統産業や伝統工芸等の技法を生かした、家具・調度品等を設置しています。多目的利用が可能なニューホールにふさわしい、建物と調和したこの「京都らしい設え」は、心地よい上質な和の雰囲気を醸し出しています。

今回は、賓客の接遇や会議等にご利用いただける、控室エリア (特別室、控室) の家具・調度品等をご紹介します。

控室



会議スペース：木象嵌の天板装飾を施したテーブルと西陣織張地に京織装飾のミーティングチェア
飾り棚、くず入れ：木象嵌の天板装飾に竹工芸の扉装飾の飾り棚、金網細工の技法を用いたくず入れ



応接ルーム：西陣織の張地のアームチェアと螺鈿漆のセンターテーブル

化粧ルーム：京焼・清水焼の手洗いボールと京たたみのスツール
飾り棚：京指物の木枠、漆の扉に蒔絵や螺鈿を装飾

PICK UP ピックアップイベント

IPCC 第49回総会

2019年5月8日 — 5月12日

IPCC第49回総会が2019年5月8日から5日間、関係各国から約700人が出席して開催されます。同総会では、途上国を含むすべての国が参加して今世紀後半に温室効果ガス排出量を実質ゼロにすることをめざす「パリ協定」の実施に不可欠な、排出量の算定方法の改良に関する報告書 (インベントリガイドライン改良報告書) が承認される見込みです。国立京都国際会館で総会に先立ち5月6日から7日にかけて同報告書主執筆者会合があり、8日から12日が総会、13日には隣接するグランドプリンスホテル京都で記者会見が行われる予定です。

環境省地球環境局 研究調査室長インタビューは P.1

WONCA Asia Pacific Regional Conference 2019 (WONCA APR2019)

2019年5月15日 — 5月19日

WONCA Asia Pacific Regional Conference 2019 が開催されます。2005年以来2回目の当館での開催となります。WONCA APR はアジア太平洋地区のプライマリ・ケアを担う医療者 (主として医師) が集う国際的組織です。世界のグローバル化、人口の高齢化、医学・医療の専門細分化、高度先端医療の進展などの社会環境の変化の中で、社会的共通資本としての医療の質と量をどう確保するのかを大命題として、家庭医・総合診療医の様々な役割とその重要性を考え、毎年学術集会を実施してきました。今回は、日本プライマリ・ケア連合学会の学術大会も合同開催で、国際的な企画が多く予定されています。

催事名 Pick up …ピックアップイベント (p.6参照)	日程
公益社団法人 日本青年会議所2019年度京都会議	1月 17日 - 20日
業界&仕事研究LIVE 京都	2月 3日
第57回関西財界セミナー	2月 7日 - 8日
第10回「KYOTO地球環境の殿堂」表彰式	2月 9日
学研グローバルナーシングセミナー メレイス博士来日講演会「移行理論の実践と教育」	2月 10日
紙博&布博 ~夢の共演!手紙社の大博覧会~	2月 23日 - 24日
第46回日本集中治療医学会学術集会	3月 1日 - 3日
就活開幕LIVE 京都	3月 4日
第19回日本糖尿病療養指導士認定試験	3月 10日
第6回同志社校友会大懇親会	3月 16日
第32回近畿小児科学会	3月 17日
2018 TPM Awards Ceremony	3月 21日 - 22日
第9回言の葉大賞授賞式	3月 23日
第63回日本リウマチ学会総会・学術集会	4月 15日 - 17日
国際ロータリー第2650地区 2019-20年度 地区研修・協議会	4月 20日
国際ソロプチミストアメリカ日本中央リジョン第33回リジョン大会及び2018年度分科会	4月 23日 - 24日
Pick up 気候変動に関する政府間パネル(IPCC) 第49回総会	5月 8日 - 12日
Pick up WONCA Asia Pacific Regional Conference 2019 (WONCA APR2019)	5月 15日 - 18日
第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会	5月 17日 - 19日

地域をぐるっと

味わ探訪

納豆餅

納豆は
京都が発祥?
山国に伝わる
郷土の味



牛若丸が修行した鞍馬山、北山杉の産地・中川、鴨川の源流・雲ヶ畑、奥山の自然豊かな京北。こうした京都北部の山間地域に受け継がれてきた伝統食品の一つが、納豆餅。大きく広げた丸餅に、練った納豆を乗せて半月状に閉じたもので、「花びら」とも呼ばれます。

山深く冬の寒さが厳しい京都北部は納豆作りの適地。その歴史も古く、京北地域は「納豆発祥の地」という伝承が残っているほど。京都が納豆の発祥地とは意外に思えますが、京都北部の山間地域では、今も正月に雑煮ではなく納豆餅を食べる風習が受け継がれています。地域に伝わる子守唄の歌詞にも納豆餅が登場するほど、古くから愛されてきた郷土の味です。

北山杉の里・中川

JRバス「山城・中川」北山
中川「中川学校前」下車

京都市北部の山間地域は、「北山杉」と呼ばれる良質の木材を供給し、古くから都を支えてきた林業の里。中でも中川地区は茶室や数寄屋建築などで床柱に用いられる「磨き丸太」の主産地で、枝打ちされ、まっすぐに伸びる北山杉の森が美しい。文豪川端康成の「古都」の舞台としても知られる。



表紙：写真はニューホールホワイエの時計。周囲を襲(かさね)の色目「秘色」をイメージした、瑠璃色に薄色の「雪輪」で彩りました。

2019年度より広報誌の電子化に伴い、紙媒体での発行は2019年冬号をもって終了します。